

部活動は勝つことだけが目的ではない！

～自主性と相手への敬意を育てる～

かつて、日本の、特に体育系の部活動指導は、顧問教師によるいわゆる熱血指導というものが主流で、管理的な指導者が多かったように思います。厳しく指導し練習に練習を重ねて、勝利を追い求めるというスタイルです。その結果、試合で優秀な成績を収めれば、学校ばかりでなく保護者からも褒め称えられ、逆に負ければ指導法を問われ、顧問教師は肩身の狭い思いをしました。勝利至上主義に向かった一因もそういうところにもあったのだと思います。

そもそも、部活動は何のためにやるのでしょうか。部活動は学校における教育活動の一部であり、教師も、所属している生徒たちもそれに多くの時間を費やしています。しかも、その指導方法や方針は顧問教師に任されている場合が多いのです。

部活動の真の目的とは何でしょうか。学習指導要領に縷々書かれてますが、私は次の二点が非常に重要だと思っています。

1つは、「子どもたちの自主性を育てること」です。子どもたち自身が考えて行動し、工夫しながら取り組み、失敗から学び、その種目の楽しさを存分に味わいながら成長していくものではないかと思うのです。

もちろん、基本的な技術や体力は身につけなければなりません。そのためのトレーニングも欠かせません。その上で、日ごろの練習の成果を“試す、機会が試合です。読んで字のごとく“試し合い、です。自分やチームの課題を解決するという目標をもって試合に臨み、試してみてもうまいければ嬉しいし、失敗すれば悔しくて改善する。もちろん、勝利を目指して試合に臨むのは当たり前ですが、たとえ負けても、真の目的は達成できるということです。

もう1つ大切な目的は、「相手に対する敬意を持つこと」です。ここで言う相手とは、まずはチームメイトです。上級生と下級生という関係ではなく、全員で助け合い、成長し合う雰囲気をつくるのが大切です。次に、相手です。これまでの練習の成果を発揮すべく、全力で戦う（競い合う）ことは相手に対する敬意の表れであり、勝ったら全力で戦ってくれた相手の努力に対して敬意を表し、負けてもまずは私たちと戦って見事勝利を得た相手を称え、その上で自分たちの反省点を見つけ出すことができるのです。

こういう態度は、子ども時代にしっかりと身につけることが大切だと思います。負けたときに悔しくて泣きながら「自分の力のなさです」というオリンピック選手もいましたが、その前に、まずは「相手がすばらしかったです。私の力が及びませんでした。おめでとうと言いたいです」と言ってほしいなと思います。

私が実際に見聞きした日本のスポーツ指導における例を3つ紹介します。

1つ目は、青山学院大学駅伝部の原晋監督です。ご存知の通り、令和6年現在、箱根駅伝6回優勝の実績を誇るチームを育て上げた名監督です。原監督は「徹底した対話重視」「選手の自立・自主性」を重んじ、監督からの高圧的な指示を一切しない方針で有名な人です。山梨大学学長の中村和彦先生から直接伺った話ですが、「もし箱根駅伝と、世界的に大きなマラソン大会が日程的に重なったら、先生はエースをどちらに出しますか」という質問に、原監督は「当然、世界マラソン大会です。選手の可能性を伸ばしたい」と述べたのに対して、他の有力校の監督はことごとく「箱根に決まってるでしょう。箱根は大学駅伝のすべてです」と答えたと言います。

完全試合を達成したロッテの佐々木朗希投手は、大船渡高校時代、國保陽平監督が連投による故障を懸念し、決勝で投げさせなかったのは、原監督に通じる指導者の信念を感じる出来事でした。そのような監督がいることがうれしいです。

2つ目は、大リーグで大活躍している大谷翔平選手の父親です。彼は今でも少年野球の指導を行っています。テレビのドキュメンタリー番組で、その指導法を見て、なるほど大谷選手が日本人離れした考え方を持っていて成功している理由がわかりました。以下は、大谷選手の父親が選手たちに向けた言葉です。

「一番大切なのは自分がどれだけ意識をもってうまくなりたいと思って練習するのかということ。打った方が楽しいだろうし、捕った方が楽しいだろうし、自分の思い描いたところに投げられた方が楽しいだろうしさ。それをやるためには努力して練習するか、練習の積み重ねによって自分が成長するとかってということなので、誰かのためにやってるわけじゃない。お父さんお母さんのためにやっているわけじゃないんだよ。あなたたち自分一人一人のためにやってることなので、ちょっと意識をもって楽しくやるためにはどうしたらいいのかっていうのを、ちょっと考えてみてくださいよ」という言葉でした。ちなみに、大谷選手が去年まで所属していた大リーグ、エンジェルスのマドン前監督の言葉も同様のことを言っているのが興味深いです。「彼の野球人生は彼のものであって、私のものでもエンジェルのものでもない。重要なのは野球をゲームだと捉えることだ。生きるか死ぬかではない。大谷のように野球を楽しむ選手が少ないんだ」

3つ目は、これも野球の話ですが、元大リーガーの投手でマリナーズに所属して63勝(日米通算170勝)をあげた、岩隈久志氏の言葉です。あるテレビ

番組の中で、岩隈氏がある少年野球チームの臨時コーチをした時のことです。岩隈氏が見た選手たちは監督の厳しい叱咤を受けて直立不動で「はい」と返事をするだけでした。その監督は一切、選手を褒めません。そこで、岩隈氏は監督に断ってから、選手たちに対して、もっと良い面を言葉にして出し合おうと伝えたのです。すると選手たちは、よいプレーをした選手に『ナイスプレー』というような言葉を掛け合うようになり、次第にお互いに良い面を褒め合うようになっていきました。そしてもう一つ、「自分の頭で考えてプレーしてみよう」ということも伝えました。すると選手の動きがよくなり、何より野球を楽しんでやる雰囲気がでてきたのです。「私は今まで褒める言葉を、あえて口にしなかったけど、今後改めます」と言った監督もりっぱでした。すがすがしい気分させられた、そんな番組でした。

以上、3つの例を紹介しましたが、ここに部活動指導の本質があると思います。子どもたちのどのような力を育てるのか、その答えがここにあると思います。ぜひ、学校教育の中で行われる部活動の目的を明確化して、真の子どもたちの「育ち」が保障されるような活動になったらいいいなと思います。そうすれば、教員が顧問をやる意味がはっきりとし、外部指導員とともに子どもたちを伸び伸びとたくましく大きく育てることができるのではないのでしょうか。

